

現場の情報を集め 指揮室を中心に関係者と調整 経験を活かし、次の「まさか」に備えます

——北海道の支援として支援物資と応援職員
の派遣は大きなものでした。平野さん
がご担当されたそうですが。



平野 宏和さん

平野 応援受援班で
物資の輸送や人的派
遣などに携わって
いて、北海道庁内に設
置された危機管理センターの指揮室での勤
務が8割以上でした。

最初の仕事は、災害救助法の適用に向け
た内閣府との調整です。適用されなければ
費用は市町村負担になりますが、被災3町
以外に各地で被害が出ていて、北海道全域
での停電という状況もあり、全市町村に対
して災害救助法の適用を、ということでも調

整し、発災したその日の午後3時頃、適用
となりました。

その後、食料の調達を行いました。最
初はどれくらいの人が避難しているかなど
被災地の状況がなかなか見えず、まずは国
の農政事務所と協議して1万食を手配する
ことにしました。

2、3日後には、被災地と連絡を取りな
がら国などからの支援を受けるようになり
ますが、必要な物資などのニーズの把握
は、情報が役場から直接入るほか、振興局
経由、現地に派遣したリエゾン経由など、
複数のルートがありました。そのため依頼
が重複して、例えば必要なのは1本の鉛筆
だったのに、現地には3本も4本も届くと

ど、色々な専門家の方に力を貸していただ
き、ありがとうございました。

——被災自治体に入り、現地で支援された
立場としてはどうだったでしょうか？



小沼 敏孝さん

小沼 発災した日は
4時少し前に指揮室
に到着し、自衛隊の
リエゾンと災害派遣
の調整等をしていたところ、7時頃に上司
から、被害が大きいとの情報が入った厚真
町への派遣を指示されました。行政職員と
2名で丘珠空港に向かい、海上保安庁のヘ
リの準備を待つて9時頃に空港を飛び立
ち、現地に着いたのは10時頃です。

まず任務分担をして、行政職員は町の
ニーズに基づく指揮室との調整を、私は救
出救助に関する情報収集・調整をすること
にしました。

自衛隊の救出救助にあたり、道路の啓開
が必要だったのですが、重機が不足してい
る状況でした。同じ厚真町役場内に道路を
管理する胆振総合振興局建設管理部の職員
がいたので、救助現場に重機を手配し、自
衛隊の指示で道路を啓開するように調整を

行いました。

行方不明者が見つかるまではおもに自衛
隊との調整を行い、その後9月いっぱい
リエゾンとして厚真町のニーズを北海道庁
の指揮室に伝えたり、毎日開催されていた
避難所運営会議に参加して避難所の声を把
握し、必要としている事項について調整す
るなどしました。



上段 貞二さん

上段 北海道では自
衛隊OBを危機対策
支援員として配置し
ているのですが、最
初は、各役場にリエゾンとして派遣されて
いた支援員との連絡調整をしました。

その後、1週間あまりむかわ町へ北海道
のリエゾンとして派遣され、その次は安平
町で同じくリエゾンとして活動し、少し期
間が空いて厚真町の避難所の支援職員とし
て派遣されました。

私がむかわ町に行った時には「1日も休
んでいない」という町職員の方がいらっ
しゃいました。発災当初から対応している
方たちに休養していただくことも北海道か
ら職員を派遣する目的でしたが、北海道と
しても職員を集めて派遣することに慣れて

- 北海道総務部危機対策局危機対策課
- 当時 応援受援班長(現 危機対策課長補佐)
- 平野 宏和さん
- 当時 厚真町リエゾン(現 危機対策課危機対策企画幹)
- 小沼 敏孝さん
- 当時 安平町・むかわ町リエゾン・厚真町避難所運営
- 上段 貞二さん
- (現 危機対策課危機対策調整員)
- 当時 消防応援活動調整本部・応援受援班・安平町避難所運営
- 菅井 大介さん
- (現 危機対策課係長)
- 当時 救出救助班・り災証明に係る調査報告業務・厚真町避難所運営
- 渡部 将さん
- (現 消防学校講師)



発災後の北海道対策本部指揮室の様子(北海道提供)

いなかった部分があり、現場からのニーズ
にすぐには応えられず、対応が遅くなった
こともあったと記憶しています。

これについてはその後、北海道の人事部
局で派遣の仕組みの改善が進められてい
ると聞いています。

——菅井さんが携わられた消防応援活動調整本部の業務、その後の人的派遣について教えてください。



菅井 大介さん

菅井 現場で活動する消防機関との調整をする役割です。地震の規模から道内のほか他県からの応援が必要になるものと判断し、札幌市、苫小牧市と連絡を取り合い、それぞれの消防には厚真町に入って調整いただきました。

速やかに全国から応援を呼ばなければいけないので、北海道は国に連絡を取り、他県からの応援を要請し、発災当日の11時くらいには仙台からヘリが到着していました。最後の行方不明者の方が見つかる9月10日までの間、私は消防の活動の調整を行っていました。

その後、12月まで平野班長のもとで応援受援班の職員派遣の窓口として、国や他県、現地、庁内との調整がメインでした。

悩ましかったのは避難所の避難者数が減っていくのに対して、避難所運営の適正人員をどう判断したらよいかということでした。今まで5名だった運営要員が、いきな

に詰めて対応していました。

この業務の後、3日間ですが、厚真町の避難所の運営支援に入り、避難所の閉鎖にも立ち会うという、なかなか経験できない仕事もさせてもらいました。

——最後に、今後に向けての取り組みを教えてください。

菅井 北海道自体も助けられたように、他県からの応援は心強いものでした。今後も他県との連携など、災害時に役立つような人的ネットワークをつくっていききたいと思っています。

渡部 私は、今は消防学校講師として道内の消防職員の教育訓練を行っています。ここでの教育として、胆振東部地震で経験したことをふまえて、災害があったら必ず被災者がいて、その被災者には家族がいて、救助に入る自分にも家族がいるということを頭に入れた活動をするように、消防職員または消防団員に伝えていきたいと思っています。

小沼 私は訓練を担当していますが、やはり防災力を向上させるためには訓練が大切ですので、引き続き貢献できるようにした

り2名に減るといいうのでは運営管理に支障が生じますから、その調整や判断に苦労しました。

もう一つは、上段調査員からもありましたように、北海道庁からの派遣は役場の方に本来業務や休養をしていただくという従事者支援の面もあり、避難所の体制は、北海道からの派遣職員を中心に運営を行う方針のもとで要員を配置しましたが、避難者の方にしてみれば地元の役場の方がいると、土地勘もあるし安心だという面もあります。町の判断で、町職員を複数人、避難所に配置するケースもありました。

——渡部さんは、救出救助班、その後、り災証明の業務にも当たられていますね。

渡部 救出救助班では、行方不明者、怪



渡部 将さん

我人、孤立している場所などの情報を収集して、初期段階で道路がすべて流されているという情報が入っていたので、ヘリコプター等運用調整班と合同で、北海道のほか、警察、札幌消防、海保、陸自、空自など関係機関が集まり、指揮室の同じ

いと思います。

上段 市町村の防災訓練には、計画の段階から運営まで道職員が応援支援を行っています。市町村には、住民・職員の方を含めて実際に災害が起きた時に活かせるように、防災訓練を継続して行っていただきたいと思っています。

平野 正直に言って、今ならできるだけど

テーブルで入ってきた情報を基に活動の方針を立てました。

私は平成28(2016)年に起きた上川や十勝地方を中心とした水害の時も、今回と同じ救出救助班でした。当時経験したのは、役場や災害対策本部には孤立している人数や場所など細かな情報がなかなか入らないのですが、警察、自衛隊、海保、消防などにはそれぞれに情報が入っていて、それらの関係機関が集まることで必要な情報を集約できるということでした。関係機関で得た情報が集まれば状況把握はある程度できるという経験をしたことで、胆振東部地震の時には指揮室に関係機関が持ち寄る情報を集めることができました。

9月10日の朝2時頃だったと思います。最後の行方不明者の方を搬送したとの情報を受けて、初期の応急対応が終わり、救出救助が終了しました。

その後は、り災証明業務に増援で入りました。対応したのは4名で、り災証明だけに特化した班です。各市町村から情報を取って集計し、内閣府に週2回報告するのですが、慣れないものですから再確認が必要になることも多く、11月末頃まで指揮室

も胆振東部地震の時にはできなかったというところも色々あります。その経験を活かして、検証委員会では今後の動きに反映することを目的に課題や改善点などについて議論・検証を行っています。我々としても同じようなことが起きた場合には、よりの確に動けるように取り組んでいきたいと思っています。



北海道災害対策本部の会議（北海道提供）



災害時のみに使用される北海道庁危機管理センターで当時を振り返る5人